



## 中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について（7）

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | <p>言語: Japanese</p> <p>出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部</p> <p>公開日: 2024-02-07</p> <p>キーワード (Ja): 唐詩, 唐詞, 異読, 訓読, 俗語, 口語, 語彙解釈</p> <p>キーワード (En): Chinese poem, Tang poetry, “idoku” , poetic vocabulary</p> <p>作成者: 高橋, 未来, 長谷川, 真史, 大山, 岩根, 有木, 大輔, 関, 沙由里, 戸高, 留美子</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属: 大阪公立大学, 東京学芸大学, 亜細亜大学, 筑波大学附属駒場中・高等学校, 兵庫県立尼崎稲園高等学校, 東京学芸大学</p> |
| URL   | <p><a href="http://hdl.handle.net/2309/0002000188">http://hdl.handle.net/2309/0002000188</a></p>                                                                                                                                                                                                                                                      |

## 中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る 唐詩の特徴的な用法について (7)

高橋 未来<sup>\*1</sup>・長谷川 真史<sup>\*2</sup>・大山 岩根<sup>\*3</sup>・  
有木 大輔<sup>\*4</sup>・関 沙由里<sup>\*5</sup>・戸高 留美子<sup>\*6</sup>

中国古典学分野

(2023年8月30日受理)

### 要 旨

本稿は、唐詩の語彙における特殊な用法を分析するものである。唐宋から金元明の詩詞や戯曲などには、時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言が詠み込まれている。それはオーソドックスな意味とは異なるために、精確な解釈にはその特殊語彙（以下、異読と称する）の意味を把握することが必要となる。そこで平成27年度紀要より、異読の用法を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』（中華書局、2014）から唐詩の用例を中心に訳出し、検討を加えてきた。本稿では、中国語のピンイン表記によるFからZまでの32項目を取り上げて、唐詩の用例及び唐以前の用例も含めて訳出、検討を行った。

検討の結果、例えば「方」「毎」「豈」等の多用される副詞にも特殊な意味が多く見られた。それを理解できるかどうかによって一詩全体の解釈が大きく異なってくる。また全体を通して杜甫の用例が目立ち、対句の用法に異読が多いことがわかる。

キーワード：唐詩、唐詞、異読、訓読、俗語、口語、語彙解釈

### はじめに

唐詩の語彙には、しばしば時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言のたぐいが見られる。それらの語彙（以下、異読と称する）は一般的な意味とは異なるため、日本の伝統的な訓読では、その意味を捉えきれない場合があった。そこで複数の研究者による研究会を開き、張相『詩詞曲語辭滙釈』（中華書局、1953）その他を再編成し、異読語彙を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』（中華書局、2014）から、唐詩の特殊な用例を訳出、検討してきた（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について」、本紀要第67集、2016～「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について（6）」、本紀要第73集、2022）。またこの成果のうち、約200項目を『中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』翻訳稿』（東京学芸大学出版会、2020年3月）に発表した。

---

\*1 大阪公立大学 文学部 言語文化学科 (558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本3-3-138)  
\*2 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)  
\*3 亜細亜大学 経営学部 経営学科 (180-8629 東京都武蔵野市境5-8)  
\*4 筑波大学附属駒場中・高等学校 (154-0001 東京都世田谷区池尻4-7-1)  
\*5 兵庫県立尼崎稲園高等学校 (661-0981 兵庫県尼崎市猪名寺3-1-1)  
\*6 東京学芸大学個人研究員

本稿はこれまでの成果に続き、唐代までの詩文における異読の用例を検討する。なお、唐詩を引用する際には『詩詞曲語辭典』の原文に拠るが、『全唐詩』（中華書局、1960）を校勘に用いた。また原則として日本の常用漢字の新字体を用いており、異体字については、意味が異なる場合のみ用いることとする。

## 1. 方 fāng

①副詞で、已に、<sup>すで</sup>に。もはやという意味を表し、通常の「正に」「<sup>はじ</sup>めて」の意味ではない。岑参「秋夕聽羅山人彈三峽流泉（秋夕に羅山人の三峽流泉<sup>1</sup>を弾ずるを聴く）」（『全唐詩』卷198）「知音難再逢，惜君方老年（知音 再びは逢い難し，君の方に老年なるを惜しむ）。戴叔倫「奉天酬別<sup>2</sup>鄭諫議雲逵盧拾遺景亮見別之作（奉天にて鄭諫議雲逵，盧拾遺景亮に別れしとき，別れらるるの作に酬ゆ）」（『全唐詩』卷273）「前悲涕未乾，後喜心已感。而我方老大，頗為風眩迫（前には悲涕未だ乾かざるに，後には喜心已に<sup>うれ</sup>感う。而して我方に老大なれば，頗る風眩の迫るところと為る）。盧綸「落第後歸山下旧居留別劉起居昆季（落第後山下の旧居に歸り，劉起居昆季に留別す）」（『全唐詩』卷276）「潘岳方称老，嵇康本厭喧。誰堪將落羽，迴首仰飛翻（潘岳<sup>す</sup>方に老ゆるを称し，嵇康本と喧しきを厭う。誰か將に落羽せんとするに堪えん，<sup>こ</sup>首を迴らせて飛翻するを仰がん）。句中の「方老」はすべて「すでに年老いた」という。皇甫冉「贈恭順皇后挽歌（恭順皇后に贈る挽歌）」（『全唐詩』卷250）「徂謝年方久，哀榮事独稀（徂謝して年方に久しきも，哀榮 事独だ稀なり）。劉禹錫「歷陽書事七十韻（歷陽にて事を書す七十韻）」（『全唐詩』卷363）「受譴時方久，分憂政未成（譴を受けて時方に久しく，分憂<sup>3</sup> 政未だ成らず）。前の皇甫冉の例は追悼詩で，後の劉禹錫の例は自序が有り，「長慶四年八月，余自夔州轉歷陽（長慶四年八月，余 夔州より歷陽に轉ず）」という。按ずるに，作者が永貞元年（805）に貶められてから長慶四年（824）までは約二十年である。故に二例中の「方久」はどちらも「已に久しい」との意である。錢起「晚次宿預館（晩に宿預の館に<sup>やど</sup>次る）」（『全唐詩』卷237）「鄉心不可問，秋氣又相逢。飄泊方千里，離悲復幾重（鄉心 問うべからず，秋氣 又た相い逢う。飄泊すること方に千里，離悲も復た幾重）。權德輿「新月与兒女夜聽琴舉酒<sup>4</sup>（新月に兒女と夜琴を聴きて酒を挙ぐ）」（『全唐詩』卷329）「乃知大隱趣，宛若滄洲心。方結偕老期，豈憚華髮侵（乃ち知る大隱の趣の，<sup>あた</sup>かも滄洲の心の若きを。方に偕老の期を結べば，豈に華髮の侵すを憚らん）。姚合「題鳳翔西郭新亭（鳳翔の西郭の新亭に題す）」（『全唐詩』卷499）「西郭塵埃外，新亭制度奇……結構方殊絕，高低更合宜（西郭 塵埃の外，新亭 制度奇なり……結構 方に殊絶にして，高低 更に宜しきに合う）。「方」はよく「復」，「豈」，「更」の字と対になる。李益「送諸暨王主簿之任（諸暨の王主簿の任に<sup>ゆ</sup>之くを送る）」（『全唐詩』卷282）「別愁已万緒，離曲方三奏。遠宦一辭鄉，南天異風候（別愁 已に万緒，離曲 方に三たび奏す。遠宦 一たび郷を辞せば，南天 風候異ならん）。「方」と「已」は互文である，また古代では別れの宴で演奏する曲は，「陽関三疊」の類のように，普通は三遍繰り返すのがきまりなので，「方」を「<sup>はじ</sup>めて」と解することはできない。張祜「夜雨」（『全唐詩』卷510）「愁腸方九迴，寂寂夜未央<sup>5</sup>（愁腸方に九迴す，寂寂たり夜の未央）。杜牧「并州道中（并州の道中）」（『全唐詩』卷525）「行役我方倦，苦吟誰復聞（行役 我方に倦れ，苦吟するも誰か復た聞かん）。吳融「岐陽蒙相国对宅因抒懷投獻（岐陽の蒙相国宅に対す，因りて懷いを抒べて投じ獻す）」（『全唐詩』卷687）「已得靜居從馬歇，不堪行色被蟬催。故園蘭菊三千里，旅夢方應校懶迴（已に靜居を得て馬の歇<sup>いこ</sup>うに従すれば，行色の蟬に催さるるに堪えず。故園 蘭菊三千里，旅夢 方に<sup>す</sup>應に校や廻るに<sup>ものう</sup>懶し）。

②副詞で，將に，近く。まもなく～するを意味し，これもまた「正に」「<sup>はじ</sup>めて」の意味ではない。鮑照「發後渚（後渚を發す）」（『先秦漢魏晉南北朝詩』<sup>6</sup>宋詩卷八）「江上氣早寒，仲秋始霜雪。從軍乏衣糧，方冬与家別（江上 氣は早寒，仲秋 始めて霜雪あり。軍に従うも衣糧乏しく，方に冬にならんとして家と別る）。「方冬」は，將に冬になろうとする，あるいは近く冬になるという意味で，すなわち上文にいうところの「仲秋」である。武元衡「晨興寄贈竇使君（晨興して竇使君に寄贈す）」（『全唐詩』卷316）「江陵歲方晏，晨起眄庭柯。白露傷紅葉，清風斷綠蘿（江陵 歲 方に<sup>まさ</sup>晏れんとし，晨起して庭柯を<sup>み</sup>眄る。白露 紅葉を傷い，清風 緑蘿を断ず）。「方晏」は將に暮れようとするというのに等しい。下の二句の景物描写は，季節が尚お深秋であることを証明する。杜甫「喜聞官軍已臨賊境二十韻（官軍の已に賊境に臨むと聞くを喜ぶ二十韻）」（『全唐詩』卷225）「天步艱方尽，時和運更遭（天步 艱 方に<sup>まさ</sup>尽きんとし，時和 運 更に遭う）。『助字辨略』<sup>7</sup>卷二「方」字の条にこの意味を収め，あわせて『詩經』<sup>8</sup>と庾信の賦<sup>9</sup>を引いているので，この用法は古くから使われてい

ることが分かる。また「方来」の項を見よ。

【方来】 fāng lái 詩詞中によく「方来」の語が用いられるが、近ごろ、または将来の意味である。韋応物「城中臥疾知閻薛二子屢從邑令飲因以贈之（城中にて疾に臥すに、閻薛二子の屢しば邑令に従いて飲むを知り、因りて以て之を贈る）」（『全唐詩』卷187）「車馬日蕭蕭，胡不枉我廬。方來從令飲，臥病獨何如（車馬日び蕭蕭たり，胡ぞ我が廬に枉げざる。方来 令に従いて飲まんとするも，病に臥すれば独り何如）」、これは近ごろの意味で，詩題が証拠となる。また韋応物「贈馮著（馮著に贈る）」（『全唐詩』卷187）「契闊仕兩京，念子亦飄蓬。方来属追往，十載事不同（契闊して兩京に仕うるも，子を念えば亦た飄蓬のごとし。方来は追往に属き，十載 事 同じからず）」、意味は上の例に同じ。（高橋）

## 2. 方便 fāng biàn

副詞で，特に，わざわざ。薛維翰「春夜裁縫（春夜に裁縫す）」（『全唐詩』卷145）「珠箔因風起，飛蛾入最能。不教人夜作，方便殺明燈（珠箔 風の起こるに因り，飛蛾 入ること最も能くす。人をして夜作せしめず，方便に明燈を殺す）」、故意にあかりを消し止めてしまったという。元稹「台中鞠獄憶開元觀旧事呈損之兼贈周兄四十韻（台中にて鞠獄するに開元觀の旧事を憶いて損之に呈し，兼ねて周兄に贈る四十韻）」（『全唐詩』卷400）「哀哉劇部職，唯數賊罪鍰。死款依稀取，闕辭方便刪（哀しいかな劇部の職，唯だ賊罪<sup>10</sup>の鍰<sup>11</sup>を数う。死款 依稀に取り，闕辭 方便に刪す）」、意味はまた，故意に判決の言葉を軽くして，なるべく死罪を免れるようにするということである。鄭城令「示女<sup>12</sup>（女に示す）」（『全唐詩』卷870）「因与太師歛笑處，為吾方便覓彭州（因りて太師と与に歛笑する處，吾の為に方便に彭州を覓めん）」、意味はまた同じ。

④方便の語は意味と用法が非常に複雑である。『辭海』新版<sup>13</sup>は①仏教に関する語で，便宜的なというような意味，②方法，弁法，③機会，④便利である，などの意味を載せている。『敦煌變文字義通釈』新版<sup>14</sup>の項には「採用不正当手段，虚妄（正しくない手段を用いる，虚偽）」という意味が載っている（221頁）。日本の塩見邦彦氏は『敦煌變文字義通釈』の説を受けて，『遊仙窟』の三例も「手段」と解釈するべきだが，それに加えて「もっともらしくふるまう」というニュアンスがあるといっている（『唐詩俗語新解<sup>15</sup>』，『立命館文学』第430－432号を参照されたい）。上にあげた例を仔細に考えると，これでも不十分なようだ。（高橋）

## 3. 髻髻 fǎng fú

副詞で，大体，ほとんど。おしはかる意味を表し，通常の「ぼんやりとしている」「似ている」の意味とは異なる。『敦煌變文』<sup>16</sup>燕子賦「脊上縫個服子，髻髻亦高尺五（脊上に個の服子を縫う，髻髻亦た高さ尺五なり）」、服子は胎子のことで，こぶを指す（『敦煌變文字義通釈』34頁<sup>17</sup>を参照）。全文の意味は，背中にこぶをつぎあわせ，その高さはだいたい一尺あまりという。白居易「達哉樂天行」（『全唐詩』卷459）「先売南坊十畝園，次売東郭五頃田。然後兼売所居宅，髻髻獲緡二三千（先ず南坊十畝の園を売り，次に東郭五頃の田を売る。然る後に兼ねて居る所の宅を売らば，髻髻緡を獲ること二三千たらん）」、これはおよその数“二三千”の前に言うので，意味は明らかである。張祜と杜牧の聯句「妓席与杜牧之同詠（妓席にて杜牧之と共に詠ず）」（『全唐詩』卷792）「骰子逡巡裏手拈，無因得見玉纖纖〔牧〕。但知報道金釵落，髻髻還應露指尖〔祜〕（骰子逡巡して手に裏みて拈り，玉の纖纖たるを見るを得るに因る無し〔杜牧〕。但知金釵の落つるを報道らせば，髻髻還た應に指尖を露わすべし〔張祜〕）」、この詩は封建社会の文人がほしいうまに酒を飲み，妓女に親しむ生活を映し出している。妓女は指先を見せないようにしているが，金釵が落ちたと嘘を告げると，妓女は必ず手で頭を探るので，大体は指先を見せてしまうことをいう。杜甫「冬狩行」（『全唐詩』卷220）「夜發猛士三千人，清晨合圍步驟同……東西南北百里間，髻髻蹴踏寒山空（夜に發す猛士三千人，清晨 圍を合わせて步驟を同じくす……東西南北百里の間，髻髻蹴踏して寒山空しくす）」、これはほとんどの意味。（高橋）

## 4. 放 fàng

教む, 使む。「教」の字と対になる用例がある。張籍「寒食内宴二首（寒食の内宴二首）」其一（『全唐詩』卷385）「千官尽醉猶教坐, 百戲皆呈未放休（千官尽く酔うも猶お坐せしめ, 百戲皆呈するも未だ休めしめず）」、「放」と「教」は互文で, みな「使む」である。また「放教」の項を見よ。

〔放教〕 fàngjiào 教む, 使む。白居易「春來頻与李二賓客郭外同遊因贈長句（春來たり頻りに李二賓客と郭外に同に遊ぶ, 因りて長句を贈る）」（『全唐詩』卷456）「可惜濟時心力在, 放教臨水復登山（惜しむべし時を濟う心力の在るに, 水に臨み復た山に登ら放教む）」。「放」と「教」とは本来同じ意味だったので, 連ねて用いて一語となったのである。（高橋）

## 5. 分 fēn

①形容詞で, 明らかである, はっきりしているの意味。戴叔倫「曉聞長樂鐘聲（曉に長樂の鐘聲を聞く）」（『全唐詩』卷273）「漢苑鐘聲早, 秦郊曙色分（漢苑 鐘聲早し, 秦郊 曙色分らかなり）」、これは曙の光が明るいことをいう。盧綸「春日陪李庶子遵善寺東院曉望（春日 李庶子に陪して遵善寺の東院に曉望す）」（『全唐詩』卷279）「映竹水田分, 当山起雁群（竹の水田に映ずること分らかなり, 山に当たりて雁群起こる）」、これは竹が水田に映って, はっきり見えることをいう。司空曙「夜聞回雁（夜 回雁を聞く）」（『全唐詩』卷292）「雁響天邊過, 高高望不分（雁響天邊に過ぎり, 高高として望めども分らかなり）」。韓愈「郴口又贈（郴口にて又た贈る）二首」其一（『全唐詩』卷343）「雪颺霜翻看不分, 雷驚電激語難聞（雪颺 霜翻りて看れども分らかなり, 雷驚 電激 語れども聞き難し）」。李紳「長門怨」（『全唐詩』卷483）「宮殿沈沈曉欲分, 昭陽宮<sup>18</sup>漏不堪聞（宮殿沈沈として曉分らかなりとす, 昭陽宮の漏<sup>19</sup>聞くに堪えず）」。周賀「宿隱靜寺上人（隱靜寺の上人に宿る）」（『全唐詩』卷503）「一宿五峰杯度寺, 虛廊中夜磬聲分（一たび宿る五峰 杯度の寺, 虛廊 中夜 磬聲分らかなり）」。杜牧「入商山（商山に入る）」（『全唐詩』卷523）「早入商山百里雲, 藍溪橋下水聲分（早に入ら 商山百里の雲, 藍溪 橋下 水聲分らかなり）」。周朴「春日遊北園寄韓侍郎（春日 北園に遊びて韓侍郎に寄す）」（『全唐詩』卷673）「灼灼春園夜<sup>20</sup>色分, 露珠千點映寒雲（灼灼たる春園 夜色 分らかなり, 露珠 千點 寒雲に映ず）」。「分」は視覚か聴覚についていい, 皆あきらか, はっきりしているという意味である。時には転じて抽象的な事物についていうこともあるが, 同じくはっきりと分かる, 理解するという意味である。孟浩然「示孟郊（孟郊に示す）」（『全唐詩』卷159）「衆音何其繁, 伯牙獨不喧。當時高深意, 舉世無能分（衆音何ぞ其れ繁なる, 伯牙獨り喧ならず。時に当たりて高深の意あるも, 世を挙げて能く分らかにする無し）」、『全唐詩』の編者は注して「按浩然與郊, 年代邈不相及, 詩題疑有謬誤（按ずるに浩然是郊と, 年代邈かに相い及ばず, 詩題疑うらくは謬誤有らんかと）」という。劉長卿「齊一和尚影堂（齊一和尚の影堂）」（『全唐詩』卷151）「一公住世忘世紛, 暫來復去誰能分（一公 世に住むも世紛を忘れ, 暫く來たりて復た去らば誰か能く分らかにせん）」。王貞白「出塞」（『全唐詩』卷701）「慣歷塞垣險, 能分部落情（塞垣の險しきを歴るに慣れ, 能く部落の情を分らかにす）」。「分」は視覚か聴覚についていい, 皆あきらか, はっきりしているという意味及びその引申義である。

②現れる, 姿を現す, 現すという意味。陳子昂「渡<sup>21</sup>荆門望楚（荆門を渡りて楚を望む）」（『全唐詩』卷84）「巴国山川尽, 荆門煙霧開。城分蒼野外, 樹斷白雲隈（巴国 山川尽き, 荆門 煙霧開く。城は分る 蒼野の外, 樹は断つ 白雲の隈）」、これは現れるという意味。この詩は, 舟が三峡を出て目の前が明るく開けた感じを描いている。城邑が広々とした平野に現れ, 木々が天辺の白雲の下にまでずっと並び生えているのである。盧綸「送吉中孚校書歸楚州旧山（吉中孚校書の楚州の旧山に帰るを送る）」（『全唐詩』卷276）「下淮風自急, 樹杪分郊邑（淮を下れば風自ら急なり, 樹杪は郊邑に分る）」。「分」は視覚か聴覚についていい, 皆あきらか, はっきりしているという意味。劉綸「秋日登醴泉泉樓（秋日 醴泉泉の樓に登る）」（『全唐詩』卷586）「閑上高樓時一望, 綠蕪寒野靜中分（閑に高樓に上りて時に一望せば, 綠蕪 寒野 靜中に分る）」。「分」は視覚か聴覚についていい, 皆あきらか, はっきりしているという意味。姚合「寄華州李中丞（華州の李中丞に寄す）」（『全唐詩』卷497）「庭分靈掌影, 窗度瀑泉聲（庭に分る靈掌の影, 窗に度る瀑泉の聲）」。「分」と「度」は対になっており, 「度」は送るという意味である（本書『詩詞曲語辭典』193頁の「度」の項を参照されたい）。鮑溶「古鑑」（『全唐詩』卷486）「曾向春窗分綽

約, 誤迴秋水照蹉跎 (曾て春窗に向かえば綽約たるを分すも, 誤りて秋水<sup>22</sup>を迴らせば蹉跎たるを照らす), これは映し出すとの意味で, 「照」と対になる。鄭谷「西蜀静松寺<sup>23</sup>松溪八韻兼寄小筆崔処士 (西蜀の静松寺の松溪八韻, 兼ねて小筆を崔処士に寄す)」(『全唐詩』卷675)「澄分僧影瘦, 光徹客心清 (澄みて僧影の瘦するを分し, 光きて客心の清きを徹す)」。李商隱「訪秋 (秋を訪ぬ)」(『全唐詩』卷540)「煙帶龍潭白, 霞分鳥道紅 (煙は龍潭の白きを帶び, 霞は鳥道に紅きを分す)」。(高橋)

## 6. 分明 fēnmíng

①周到である, 行き届いているの意味。通常の「明らかである」という意味とは異なる。杜甫「新安吏 (新安の吏)」(『全唐詩』卷217)「況乃王師順, 撫養甚分明。送行勿泣血, 僕射如父兄 (況や乃ち王師の順なるをや, 撫養甚だ分明なり。行を送るも泣血すること勿かれ, 僕射は父兄の如し)」, この「分明」の用例に対して, 注釈者はしばしば理解していない。仇兆鰲『杜少陵集詳注』<sup>24</sup>は「師順則能<sup>25</sup>制勝, 撫養則能優恤 (師は順なれば則ち能く勝ちを制し, 撫養すれば則ち能く優恤す)」といい, 「分明」には言及していない。中国社会科学院文学研究所『唐詩選』<sup>26</sup>の注は「順, 猶言師出有名, 甚分明言王師對士卒の撫愛は毋庸置疑の (順とは, 出陣すると名を上げるというようなこと, 甚だ分明なりとは, 官軍が士卒に慈愛を施すのは疑いようがないことをいう)」といい, 「分明」の意味を明らかであるという意味の引申義と見なすようだが, 実はまだ議論の余地がある。この「分明」は周到であるという意味のはずで, つづく下の句の意味は, 僕射すなわち郭子儀の士卒に対する慈愛は父兄のようで, とても行き届いているという。「分明」が行き届くという意味を持つのは, 杜甫の詩中に他に用例がある。杜甫「解憂 (憂いを解く)」(『全唐詩』卷223)「百慮視安危, 分明曩賢計 (百慮して安危を視るは, 分明なり曩賢の計)」, 『杜詩鏡銓』<sup>27</sup>に「言視安如危, 乃曩賢患深遠之道 (安を視ること危の如くし, 乃ち曩賢の患いは深遠の道なるを言う)」という。下の句の語順は, 句の意味を考えると, 実際には「曩賢計分明」に作るべきである。前賢の思慮は非常に周到であるという意味で, 上の句の「百慮」と対応している。また『全唐詩』卷675鄭谷「蠟燭」に「淚滴杯盤何所恨, 燼飄蘭麝暗和香。多情更有分明処, 照得歌塵下燕梁 (淚 杯盤に滴るは何の恨む所ぞ, 燼 飄りて蘭麝暗かに香を和す。多情更に有り 分明なる処, 歌塵を照らし得て 燕 梁より下る)」, 意味はまた同じ。

②注意深い。『太平広記』<sup>28</sup>卷252「李曜」の条に引く「叙情詩」に「唐尚書李曜罷歙州, 与呉円交代。有佐酒録事名媚川, 聰明敏慧。李頗留意, 而已納宮籍妓韶光。托於替人, 令存恤之。臨發洪飲, 不勝離情。有詩曰『經年理郡少歡娛, 為習干戈間飲徒。今日臨行尽交割, 分明收取媚川珠。』(唐の尚書李曜 歙州を罷め, 呉円と交代す。酒録事を佐けて媚川と名づくるもの有り, 聰明にして敏慧なり。李 頗る意を留むるも, 而して已に宮籍の妓韶光を納る。替人に托して, 之を存恤せしむ。発するに臨みて洪飲し, 離情に勝えず。詩に曰う有り『經年郡を理めて歡娛少なく, 為に干戈を習いて間 飲徒たり。今日行に臨むに交割を尽くせば, 分明に收取せよ媚川の珠。』と)」, 詩はまた『全唐詩』卷768<sup>29</sup>に見える。この詩は物を以て人に擬えており, 意味は明らかである, 相手に対して気をつけて収めよ, 注意深く収めよと懇ろに言い聞かせるということで, つまり上文の「存恤 (慰め救済する)」の意味である。蘇頌「景龍觀送裴士曹 (景龍觀にて裴士曹を送る)」(『全唐詩』卷73)「君還洛邑分明記, 此処同來閱歲華 (君洛邑に還りては分明に記せ, 此処に同に來たりて歲華を閱しを)」。司空圖「馮燕歌 (馮燕の歌)」(『全唐詩』卷634)「為感詞人沈下賢, 長歌更与分明說 (為に感ず 詞人の沈下賢, 長歌して更に与に分明に説く)」。皮日休「聞魯望遊顏家園林<sup>30</sup>病中有寄 (魯望の顏家の園林に遊ぶを聞き, 病中に寄する有り)」(『全唐詩』卷613)「分明不得同君賞, 尽日傾心羨索郎 (分明に君と同一に賞するを得ざれば, 尽日心を傾けて索郎を羨む)」, 索郎とは酒をいう。崔塗「上巳日永崇里言懷 (上巳の日 永崇里にて懷いを言う)」(『全唐詩』卷679)「未敢分明賞物華, 十年如見夢中花 (未だ敢て分明に物華を賞せず, 十年見るが如し夢中の花)」。吳商浩「塞上即事」(『全唐詩』卷774)「戰士歿邊魂尚哭, 單于獵處火猶紅。分明更想殘宵夢, 故国依然到<sup>31</sup>甬東 (戰士邊に歿して 魂尚お哭し, 單于獵する處 火猶お紅なり。分明に更に想うは殘宵の夢, 故国依然として甬東に到る)」, 甬東は古の地名で, 今の浙江省定海県の一带である。みな, 注意深く記す, 細やかに愛でる, 細やかに思うというのと同じである。皮日休の詩は平仄の関係で「分明」が句の頭にあるが, 語順は実際には「不得同君分明賞」とするべきである。(高橋)

## 7. 分張 fēnzhāng

分ける。杜甫「佐還山後寄（佐 山に還りて後、寄す）三首」其二（『全唐詩』卷225）「白露黃梁熟，分張素有期。已應春得細，頗覺寄來遲（白露 黃梁熟し，分張 素と期有り。已に應に春き得て細なるべし，頗る寄せ來たることの遅きを覚ゆ）」，杜佐は昔杜甫に，黃梁が熟したらすぐに分け与えると約束したという。白居易「和微之詩二十三首 和自勸二首（微之に和す詩二十三首 自ら勸むるに和す二首）」其二（『全唐詩』卷445）「身飲數杯妻一醺，余酌分張與兒女（身らは數杯を飲み妻は一醺，余酌分張して兒女に与う）」。（高橋）

## 8. 擊 jī

激しい。杜甫「白水泉崔少府十九翁高齊三十韻（白水泉の崔少府十九翁の高齊 三十韻）」（『全唐詩』卷216）「泉聲聞復急，動靜隨所擊（泉聲 聞こえて復た急なるは，動靜 擊しき所に随えばなり）」，「擊」は陳師道が「激」に作る<sup>32</sup>。

〔按〕宋の蔡夢弼『杜工部草堂詩箋』<sup>33</sup>卷八は「激は一に擊に作るは間違いである」という。「激」は正字で「擊」は仮借文字であり，唐代の写本は概ねこのようである。齊己「嘗茶（茶を嘗む）」（『全唐詩』卷838）「味擊詩魔亂，香搜睡思輕（味は詩魔を擊しくして乱れ，香は睡思を搜りて輕し）」，「擊」は激しいである。鄭谷「西蜀淨衆寺松溪八韻兼寄小筆崔處士（西蜀の淨衆寺の松溪八韻 兼ねて小筆崔處士に寄す）」（『全唐詩』卷675）「帶梵侵雲響，和鐘擊石鳴（梵を帶び雲響を侵し，鐘を和して石鳴を擊しくす）」，これも溪水が石に激しく当たるを言い，あるテキストではまさに「激」字に作る（『全唐詩』に拠る）。

敦煌『捉季布伝文』（『敦煌變文集』<sup>34</sup>卷一所収）に「擊分聲悽而対曰，『説着來由愁殺人。不問且言為賤士，既問須知非下人。楚王弁士英雄將，漢帝怨家季布身』（擊しく分りて聲 悽にして對えて曰わく，『人を愁殺する來由を説着す。且く賤士と為ると言うを問わずして，既に須らく下人に非ざると知るべきを問う。楚王の弁士は英雄の將なり，漢帝の怨家は季布の身なり』と）」，「擊分」は字面どおりで読めば意味が通じず，実際には「激忿」の意味である。これはすべて「擊」を「激」とする証拠である。「急」字は「息」字に作るべきで，「靜」字と対応する。（有木）

## 9. 即 jí

副詞，却って，転折の語氣を表す。高適「酬河南節度使賀蘭大夫見贈之作（河南節度使賀蘭大夫に贈らるるの作に酬ゆ）」（『全唐詩』卷214）「感時常激切，於己即忘情（時に感じては常に激切し，己に於いては即って情を忘る）」，これはかえって情を忘れるを言う。白居易「自詠」（『全唐詩』卷431）「誠知此事非，又過知非年。豈不欲自改，改即心不安（誠に此の事の非なるを知り，又知非の年を過ぐ。豈に自ら改めんと欲せざらんや，改むれば即って心安からず）」，これは（自分の暮らしを）改めるとかえって心が不安になることをいう。鄭谷「荔枝」（『全唐詩』卷674）「南荒何所恋，為爾即忘歸（南のかた荒るるは何ぞ恋する所ぞ，爾の為に即って帰るを忘る）」。羅隱「衡陽泊木居士廟下作（衡陽の木居士廟下に泊るの作）」（『全唐詩』卷656）「只應神物長為主，未必浮槎即有靈（只だ神物に應じて長じて主と為り，未だ必ずしも槎を浮べざるも即って靈有り）」。朱湾「詠柏板（柏板を詠ず）」（『全唐詩』卷306）「空為歌偏苦，仍愁和即難（空しく歌を為るは偏えに苦なり，仍ほ愁和するは即って難し）」。司空図「馮燕歌」（『全唐詩』卷634）「回身本謂取巾難，倒柄方知授霜刃。馮君撫劍即遲疑，自顧生平<sup>35</sup>心不欺（身を回らせ本と巾を取るに難しと謂い，柄を倒して方に霜刃を授くを知る。馮君 劍を撫して即って遅く疑い，自ら生平を顧みて心欺かず）」。

上に挙げた各例は，前後の文で明らかに語氣が転折し，「即」には明らかに「却」の意味も見られる。

案ずるに古代の「即」と「則」の音義も近く，「則」には転折語氣の用法も見られることは『詩詞曲語辭典』772ページの「則」の項を参照。「即」も同様である。（有木）

10. 幾<sup>じ</sup>

①何ぞ, 那ぞ, 怎<sup>いか</sup>で。李白「送祝八之江東賦得浣紗石(祝八の江東に之<sup>ゆ</sup>くを送り浣紗石を賦し得たり)」(『全唐詩』巻176)「君去西秦適東越, 碧山青江幾超忽(君は西秦を去りて東越に適<sup>ゆ</sup>く, 碧山青江 幾<sup>なん</sup>ぞ超忽たらん)」, 「超忽」は遠いさま。「幾超忽」はどうして遠いのかということ。杜甫「西閣口号呈元二十一(西閣口号 元二十一に呈す)」(『全唐詩』巻229)「社稷堪流涕, 安危在運籌。看君話王室, 感動幾銷憂(社稷 流涕するに堪え, 安危 運籌に在り。君が王室を看<sup>かた</sup>て, 感動して幾<sup>なん</sup>ぞ憂いを銷さん)」, 「幾銷憂」はどうして憂いを消すだろうかということ。劉長卿「上巳日越中与鮑侍郎泛舟耶溪(上巳の日 越中にて鮑侍郎と舟を耶溪に泛<sup>う</sup>かぶ)」(『全唐詩』巻151)「君見漁船時借問, 桃源幾路入煙霞(君は漁船を見て時に借問す, 桃源幾<sup>いず</sup>れの路にて煙霞に入らんと)」, 「幾路」はどの道ということ。

②副詞, 屢々(しばしば)。『玉台新詠』巻六, 王僧孺「月夜詠陳南康新有所納(月夜に陳南康新たに納るる所有るを詠ず)」「重価出秦韓, 高名入燕鄭。十城屢請易, 千金幾爭聘(重価 秦韓より出で, 高名 燕鄭に入る。十城 屢<sup>しば</sup>しば易えんと請い, 千金 幾<sup>しば</sup>しば聘せんと争う)」。駱賓王「疇昔篇」(『全唐詩』巻77)「上苑頻經柳絮飛, 中園幾見梅花落(上苑 頻りに柳絮の飛ぶを経て, 中園 幾<sup>しば</sup>しば梅花の落つるを見る)」。白居易「東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十二補闕杜十四拾遺李二十助教員外竇七校書(東南行一百韻 通州の元九侍御・澧州の李十一舍人・果州の崔二十二使君・開州の韋大員外・庾三十二補闕・杜十四拾遺・李二十助教員外・竇七校書に寄す)」(『全唐詩』巻439)「幾見林抽筍, 頻驚燕引雛(幾<sup>しば</sup>しば見る 林の筍を抽くを, 頻りに驚く 燕の雛<sup>みちび</sup>を引くに)」, 「幾」は「屢」「頻」と互文である。李百葉「王師渡漢水經襄陽(王師が漢水を渡りて襄陽を経る)」(『全唐詩』巻43)「閨川已多嘆, 退睇幾増傷(閨川 已に多く嘆き, 退睇 幾<sup>しば</sup>しば増傷す)」。蘇味道「九江口南濟北接蘄春南与潯陽岸(九江口の南濟 北のかた蘄春の南と潯陽の岸とに接す)」(『全唐詩』巻65)「鱗介多潜育, 漁商幾泝洄(鱗介 多く潜かに育ち, 漁商 幾<sup>しば</sup>しば泝洄す)」。齊己「採蓮曲」(『全唐詩』巻847)「時逢島嶼泊, 幾伴<sup>36</sup>鴛鴦眠(時に逢いて島嶼に泊まり, 幾<sup>しば</sup>しば伴いて鴛鴦眠る)」, 「幾」は「多」「時」と合わせて相応する。楊炯「梅花落」(『全唐詩』巻50)「行人断消息, 春恨幾裴回(行人 消息断え, 春恨 幾<sup>しば</sup>しば裴回す)」。孟浩然「和張判官登万山亭因贈都督韓公(張判官の万山亭に登るに和して因りて都督の韓公に贈る)」(『全唐詩』巻60)「皇華一動詠, 荊国幾謡吟(皇華 一たび動詠せば, 荊国 幾<sup>しば</sup>しば謡吟す)」, 「幾謡」は一に「盛謳」に作り, 「盛」には「多」の意味がある。両者はとても近い。韓偓「柳」(『全唐詩』巻680)「一籠金線抃弯橋, 幾被兒童損細腰(一籠の金線 弯橋を払い, 幾<sup>しば</sup>しば兒童に細腰を損なわせらる)」。(有木)

11. 際<sup>じ</sup>

①方向詞, 多方面に対して表すことができ, 「果て」という意味に限らない。王勃「上巳浮江宴韻得趾字(上巳に江に浮かび宴するの韻 趾字を得たり)」(『全唐詩』巻55)「松吟白雲際, 桂馥青溪裏(松は吟ず 白雲の際, 桂は馥し 青溪の裏)」。駱賓王「艷情代郭氏答盧照鄰(艷情 郭氏に代りて盧照鄰に答う)」(『全唐詩』巻77)「當時擬弄掌中珠, 豈謂先摧庭際玉(當時 弄せんと擬るは掌の中の珠, 豈に謂わん 先ず庭の際<sup>なか</sup>の玉を摧すを)」。2例中の「際」は「里」「中」と互文であり, 「雲の間」「庭の中」をいう。王維「春園即事」(『全唐詩』巻26)「草際成棋局, 林端拈桔槔(草の際<sup>なか</sup>に棋局を成し, 林の端に桔槔を拈ぐ)」, これは「端」と互文であり, 「端」も「中」「間」の意味を表し, 194頁の「端」を参照。李林甫「秋夜望月憶韓席等諸侍郎因以投贈(秋夜 月を望みて韓席等諸侍郎を憶い因りて以て投贈す)」(『全唐詩』巻121)「皓皓庭際色, 稍稍林下光(皓皓たる庭の際<sup>なか</sup>の色, 稍稍たる林の下の光)」。李嶠「舟」(『全唐詩』巻60)「相鳥風際轉, 画鷁浪前開(相鳥 風の際<sup>なか</sup>に轉じ, 画鷁 浪の前に開く)」。孟浩然「南歸阻雪(南歸するも雪に阻まる)」(『全唐詩』巻159)「孤煙村際起, 歸雁天辺去(孤煙 村の際<sup>うち</sup>に起り, 歸雁 天の辺りに去れり)」。劉希夷「公子行」(『全唐詩』巻82)「花際裴回双蛺蝶, 池邊顧步兩鴛鴦(花の際<sup>うち</sup>に裴回す 双蛺蝶, 池の辺りに顧歩す 兩鴛鴦)」。

以上は「中」「間」の方向を表す例である。

この他, 「際」はさらに「上」「下」の方向を表すことができる。楊巨源「別鶴詞送令狐校書之桂府(別鶴詞 令狐校書の桂府に之<sup>ゆ</sup>くを送る)」(『全唐詩』巻333)「含情九霄際, 顧侶五雲前(情を含む 九霄の際, 侶を顧

みる 五雲の前)」、これは別鶴が天を衝くことで、九天の上と解釈できよう。王維「汎前陂（前陂に汎<sup>うか</sup>ぶ）」（『全唐詩』巻126「暢以沙際鶴、兼之雲外山（暢ぶるに沙の<sup>の</sup>際<sup>うえ</sup>の鶴を以てし、之を兼ねるに雲の外<sup>うへ</sup>の山）」）。王琚「自荊湖入朝至岳陽奉別張燕公（荊湖より朝に入り岳陽に至りて張燕公に奉別す）」（『全唐詩』巻98）「遠樹煙間没、長江地際遙（遠樹 煙の間に没し、長江 地の<sup>うへ</sup>際<sup>うえ</sup>に遙かなり）」、みな「沙上」「地上」……を言う。

李頎「送馬録事赴永陽（馬録事の永陽に赴くを送る）」（『全唐詩』巻132）「野鶴宿簷際、楚雲飛面前（野鶴 簷<sup>した</sup>の際に宿り、楚雲 面の前に飛ぶ）」、これは「檐の下」をいう。

②動詞、「連続する」「近寄る」。

席豫「奉和聖製送張說巡辺（聖製 張説の巡辺するを送るに和し奉る）」（『全唐詩』巻111）「亭障東縁海、沙場北際天（亭障 東のかた海に縁り、沙場 北のかた天に際<sup>よ</sup>る）」、これは「天に接する」を言う。

王湾「晚春詣蘇州敬贈武員外（晩春に蘇州に詣り敬いて武員外に贈る）」（『全唐詩』巻115）「際曉雜氛散、殘春衆物芳（曉に際<sup>ちか</sup>く雜氛散じ、殘春 衆物芳し）」。綦毋潜「春泛若耶溪（春に若耶溪に泛ぶ）」（『全唐詩』巻135）「際夜輒西壑、隔山望南斗（夜に際<sup>ちか</sup>く西壑に輒じ、山を隔てて南斗を望む）」、みな「曉に近い」「夜に近い」ことを言う。（有木）

## 1 2. 寂寞 jìmò

本義は「物寂しい」であるが、転じて「衰える」「疲れ果てる」などの意味になる。杜甫「觀公孫大娘弟子舞劍器行（公孫大娘の弟子の劍器を舞うを觀るの行）」（『全唐詩』巻222）「絳脣珠袖兩寂寞、晚有弟子伝芬芳（絳脣珠袖 両つながら寂寞<sup>おとろ</sup>え、晩にして弟子有り芬芳を伝う）」。杜甫「無家別（無家の別れ）」（『全唐詩』巻217）「寂寞天<sup>おとろ</sup>宝後、園廬但蒿藜（寂寞<sup>おとろ</sup>えたり天<sup>おとろ</sup>宝の後、園廬には但だ蒿藜）」。杜甫「季秋江村」（『全唐詩』巻229）「遠遊雖寂寞、難見此山川（遠遊 <sup>おとろ</sup>寂寞<sup>おとろ</sup>えたりと雖も、此の山川を見ること難し）」、これらは「衰える」の意味になる。また「死亡」を遠回しの言葉に用いることができる。杜甫「解悶十二首」其九（『全唐詩』巻230）「先帝貴妃今寂寞、荔枝還復入長安（先帝貴妃 今寂寞<sup>な</sup>くなれり、荔枝還お復た長安に入る）」、この例の中の「寂寞」は明らかに「死ぬ」の意味を指す。李白「將進酒」（『全唐詩』巻162）「古來聖賢皆寂寞、惟有飲者留其名（古來の聖賢 皆な寂寞<sup>や</sup>れたり、惟だ飲者の其の名を留むる有り）」、この例の中の「寂寞」も生前に失意するほどやつれると解釈でき、下句の「留其名」と対をなし、死亡すると解釈できよう。

【寂寥】 jìliáo 「寂寞」と同義。杜甫「奉贈盧五丈參謀（盧五丈參謀に贈り奉る）」（『全唐詩』巻233）「天子多恩沢、蒼生輒寂寥（天子 恩沢多きも、蒼生輒た寂寥<sup>や</sup>れたり）」、これは「疲れ果てる」の意味になる。杜甫「哭王彭州掄（王彭州掄を哭す）」（『全唐詩』巻231）「執友驚淪没、斯人已寂寥（執友 淪没に驚く、斯の人 已に寂寥<sup>な</sup>くなれり）」、これは「死亡する」の遠回しの言い方。（有木）

## 1 3. 計会 jìkuài

通知する。白居易「府西池」（『全唐詩』巻451）「柳無氣力枝先動、池有波紋氷尽開。今日不知誰計会、春風春水一時来（柳に氣力無くして枝先ず動き、池に有波紋りて氷尽く開く。今日知らず 誰か計会<sup>つ</sup>えるを、春風春水 一時に来たる）」、意味は誰が伝えたのかわからないこと。劉禹錫「吳方之見示独酌小醉首篇樂天統有酬答皆含戲謔極至風流兩篇之中並蒙見属輒呈濫吹益美來章（吳方之が独酌小醉<sup>さいわ</sup>の首篇を示され、樂天が続いて酬いて答<sup>よみ</sup>る有り、皆戲謔を含んで極めて風流に至る、兩篇の中、並びに蒙いに属<sup>つづ</sup>らる、輒ち濫吹を呈し益ます來章を美す）」（『全唐詩』巻360）「散金疏傅尋常樂、枕麴劉生取次歌、計会雪中争挈榼、鹿裘鶴氅遞相過（金を散ぜし疏傅は尋常に樂しみ、麴を枕にせし劉生は取次に歌う。雪中に計会<sup>つた</sup>えて争<sup>さか</sup>いて榼<sup>たずさ</sup>を挈え、鹿裘 鶴氅 遞いに相い過ぐ）」。

別の筆記の中に用例も多く、『唐宋筆記語彙』<sup>37</sup>2001年修訂本を参照。（有木）

#### 14. 麻茶 máchá

形容詞。「模糊（あいまい，ぼんやり）」というようなものであり，多くは視力について言う。李涉「題宇文秀才桜桃（宇文秀才の桜桃に題す）」（『全唐詩』卷477）「今日顛狂任君笑，趁愁得醉眼麻茶（今日の顛狂 君の笑うに任せ，愁いを<sup>お</sup>趁わんとして酔いを得れば 眼は麻茶たり）」。（大山）

#### 15. 麼 ma

疑問詞。王建「宮詞一百首」其六三（『全唐詩』卷302）「衆中遺却金釵子，拾得從他要贖麼（衆中遺却す金の釵子，拾い得るも他に<sup>かれむか</sup>從いて贖うを要むるや麼や）」。「麼」は一説に花萼夫人の「宮詞」であるとす。賈島「王侍御南原莊（王侍御の南原の莊）」（『全唐詩』卷573）「南齋宿雨後，仍許重来麼（南齋 宿雨の後，仍お重ねて来たるを許さるや麼や）」。「麼」は姚岩傑「報顔標（顔標に報ゆ）」（『全唐詩』卷667）「為報顔公識我麼，我心唯只与天和（為に報ゆ 顔公我を識るや麼や，我が心 唯只天とのみ和す）」。「麼」は齊己「送僧帰洛中（僧の洛中に帰るを送る）」（『全唐詩』卷843）「叮嚀与訪春山寺，白樂天真在也麼（<sup>ねんこ</sup>叮嚀ろに<sup>ため</sup>与に訪ねよ 春の山寺，白樂天 真に在るや麼や）」。「麼」は李中「聽蟬寄胸山孫明府（蟬を聴きて胸山の孫明府に寄す）」（『全唐詩』卷748）「不知陶靖節，還動此心麼（知らず 陶靖節，還た此の心を動かせるや麼や）」。

以上が唐詩に用いられる「麼」字の概略である。『詩詞曲語辭典』405頁にも「麼（me）」の項目がある。（大山）

#### 16. 謾 màn

否定の副詞。「莫」に通じる。『広雅』釈詁<sup>38</sup>に「曼・莫，無也（曼・莫は無なり）」とある。王念孫の疏に「曼・莫・無，一声之転（曼・莫・無は一声の転）」とある。「曼」は「莫」として解釈でき，「謾」も同じである。白居易「送河南尹馮学士赴任（河南尹の馮学士の任に赴くを送る）」（『全唐詩』卷449）「謾誇河北操旄鉞，莫羨江西擁旆旌（<sup>な</sup>誇る謾かれ 河北に旄鉞を操るを，羨む莫かれ 江西に旆旌を擁するを）」。「謾」は自注に「時新除二鎮節度（時に新たに二鎮の節度を除す）」という。「謾」と「莫」は互文。

〔漫〕 màn 「謾」と同じ。杜甫「一百五日夜對月（一百五日の夜月に対す）」（『全唐詩』卷224）「牛女漫愁思，秋期猶渡河（牛女 愁思する漫かれ，秋には期す 猶お河を渡るを）」。「漫」は趙次公の注に「漫則以不必愁思，蓋猶有渡河之期（漫は則ち以えらく必ずしも愁思せず，蓋し猶お渡河の期有り，と）」とある<sup>39</sup>。杜甫「絕句三首」其三<sup>40</sup>（『全唐詩』卷234）「漫<sup>41</sup>道春來好，狂風太<sup>42</sup>放顛。吹花隨水去，翻却釣魚船（<sup>な</sup>道う漫かれ 春來たること好しと，狂風 太だ放顛。花を吹きて水に隨いて去らしめ，翻却す 釣魚の船）」。（大山）

#### 17. 漫 màn

元々は「漫不經意（全く気にかけない）」の「漫」であるが，「聊且（ともかく，一応）」あるいは「胡乱（みだりに，でたらめに）」の意味もある。転じて「徒（いたずらに）」，あるいは「空（むなしく）」の意味になる。「聊且」の意味で解釈するものは，杜甫「閣夜」（『全唐詩』卷229）「臥龍躍馬終黃土，人事音書<sup>43</sup>漫寂寥（臥龍躍馬 終に黃土，人事音書 漫か寂寥）」。「漫寂寥」は寂寥のままにしておこう，という意味である。杜甫「江上值水如海勢聊短述（江上水の海勢の如きに値い，聊か短述す）」（『全唐詩』卷226）「老去詩篇渾漫与<sup>44</sup>，春來花鳥莫深愁（老い去りて詩篇 渾て漫か与え，春來たりて花鳥 深く愁うる莫し）」。「漫与」は風景に即して思いを記し，ひとまずやり過ごす，という意味である。『詩詞曲語辭典』746頁「与」の項の「漫与」も参照のこと。また『杜工部集』中の「漫興」や「漫成」といった詩題は全て意の赴くままに作った，という意味である。これらが「聊且」として解釈するものである。

「胡乱」として解釈するものは，現代語の「浪漫（勝手気まま）」に極めて近い。元結「漫酬賈沔州 并序（<sup>みだ</sup>漫りに賈沔州に酬ゆ 並びに序）」（『全唐詩』卷241）「漫醉人不嘆，漫眠人不喚。漫遊無遠近，漫樂無早晏。

漫中漫亦忘，名利誰能算（<sup>みだ</sup>漫りに酔うも人嗔らず，漫りに眠るも人喚ばず。漫りに遊びて遠近無く，漫りに樂しみて早晏無し。漫中 漫なるも亦忘れ，名利 誰か能く算えん）。詩中の「漫」字は全て「胡乱」あるいは「隨便（気ままに）」の意味である。元結「遊瀧泉示泉上学者（瀧泉に遊び，泉上の学者に示す）」（『全唐詩』卷241）「顧吾漫浪久，不欲有所拘（顧みるに吾 漫浪久しく，<sup>とら</sup>拘わること有るを欲せず）。意味は上と同じ。元結は初め「浪士<sup>マ</sup>」と称し，次いで「漫郎」と称し，老いてからは「漫叟」と称したので，だから「漫浪久し」というのである。今では倒置して「浪漫」という。杜甫「聞官軍收河南北<sup>46</sup>（官軍の河の南北を収むるを聞く）」（『全唐詩』卷227）「却看妻子愁何在，漫卷詩書喜欲狂（却って妻子を看れば愁い何くにか在る，<sup>みだ</sup>漫りに詩書を巻き喜びて狂ならんと欲す）。手あたり次第詩や書を巻いて収納し帰郷の準備をすることをいう。

杜甫「賓至<sup>47</sup>（賓至る）」（『全唐詩』卷226）「豈有文章驚海內，漫勞車馬駐江干（豈に文章の海内を驚かすこと有らんや，<sup>むな</sup>漫しく労す 車馬の江干に駐まるを）。劉禹錫「三閣辭 四首」其四（『全唐詩』卷364）「朱門漫臨水，不可見鱸魚（朱門 <sup>むな</sup>漫しく水に臨み，鱸魚を見るべからず）。陸龜蒙「江南秋懷寄華陽山人（江南秋懷 華陽山人に寄す）」（『全唐詩』卷623）「衣裾徒博大，文籍漫縱橫（衣裾 徒に博大，文籍 <sup>いたずら</sup>漫に縱橫）。杜甫「偶題」（『全唐詩』卷230）「漫作潛夫論，虛伝幼婦碑（<sup>むな</sup>漫しく作る 潛夫論，虚しく伝う 幼婦碑）。「虚」と「空」は同義である。「枉（まげて）」と対で挙げて互文となるものがある。

【謾】màn「聊且（ともかく，一応）」「胡乱（みだりに，でたらめに）」「徒（いたずらに）」「空（むなしく）」の意味がある。「徒」「空」の意味で解釈するものが多く，いくつか例を挙げる。岑参「行軍詩二首」其二（『全唐詩』卷198）「早知逢世乱，少小謾讀書。悔不学彎弓，向東射狂胡（早に世の乱るるに逢うを知るも，少小 <sup>いたずら</sup>謾に讀書す。悔ゆ 彎弓を学び，東に向かいて狂胡を射ざるを）。李白「述德兼陳情上哥舒大夫（徳を述べ兼ねて情を陳べて哥舒大夫に上る）」（『全唐詩』卷168）「衛青謾作大將軍，白起真成一豎子（衛青 <sup>むな</sup>謾しく作る大將軍，白起真に成る 一豎子）。羅隱「仙掌」（『全唐詩』卷657）「謾向山頭高举手，何曾招得路行人（<sup>いたずら</sup>謾に山頭に向りて高く手を挙ぐるも，何ぞ曾て路行の人を招き得たる）。これらはすべて「徒」「空」の意味である。（大山）

## 18. 每 měi

時間副詞。「曾經（かつて）」「已經（すでに）。杜甫「送李校書二十六韻（李校書を送る二十六韻）」（『全唐詩』卷217）「十五富文史，十八足賓客。十九授校書，二十声輝赫。衆中每一見，使我潛動魄（十五にして文史に富み，十八にして賓客足し。十九にして校書を授けられ，二十にして声は輝赫たり。衆中 毎て一たび見え，我をして潜かに魄を動かしむ）。杜甫「壯遊」（『全唐詩』卷222）「每趨吳太伯，撫事淚浪浪（毎て吳の太伯に趨き，事を撫して涙浪浪たり）。この2首の詩はいずれも昔のことを思い出しており，「見（まみえる）」「趨（おもむく）」いずれも何度も繰り返す動作ではあり得ず，「毎」は明らかに「毎毎（いつも）」「常常（よく）」の意味では解釈できず，かつてあった一回限りの経験を表す。杜牧「九華山」（童養年輯録『全唐詩統補遺』卷7）<sup>48</sup>「昔年幽賞快疎慵，每喜佳山在邑封（昔年の幽賞 快く疎慵，<sup>かつ</sup>毎て喜ぶ 佳山の邑封に在るを）。「毎」と「昔」は対応し，「每喜」は「曾喜」である。（大山）

## 19. 明当 míngdāng

明日。王維「宿鄭州（鄭州に宿る）」（『全唐詩』卷125）「明当渡京水，昨晚猶金谷（明当 京水を渡らんとす，昨晚 猶お金谷）。張彪「古別離」（『全唐詩』卷259）「縱知明当返，一息千万思（<sup>たと</sup>縦い明当返ると知るも，一息 千万の思い）。（大山）

## 20. 模糊 móhú

華やかで美しい。杜甫「送蔡希曾都尉還隴右，因寄高三十五書記（蔡希曾都尉の隴右に還るを送り，因りて高三十五書記に寄す）」（『全唐詩』卷224）「馬頭金匱匠<sup>49</sup>，駝背錦模糊（馬頭 金は匱匠たり，駝背 錦は模糊

たり)。(大山)

## 21. 莫 mò

副詞で、恐らく・「恐怕（おそらく）」の意、否定を表すのではなく十分に断言できない推測を表す。杜甫「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻（秋日夔府詠懷 鄭監李賓客に奉り寄す一百韻）」（『全唐詩』卷230）「即今龍厖水，莫帶犬戎羶（即今 龍厖の水，<sup>おそ</sup>らくは犬戎の<sup>なまぐさ</sup>羶きを帶ぶるならん）」。恐らくは今もなお異民族の放つ生臭いにおいが染みついているだろう，という意味である。崔道融「春閨二首」其二（『全唐詩』卷714）「遼陽在何處，莫望寄征袍（遼陽は何處にか在らん，<sup>おそ</sup>らくは征袍を寄するを望むならん）」。これもまた閨の中にいる若い妻の口吻を以って，遼陽の守備に就く者が折しも家から防寒着が送られてくるのを心待ちにしているのではなかろうか，と想像してうたうのである。王諲「閨情」（『全唐詩』卷145）「昨來頻夢見，夫婿莫應知（昨來 頻りに夢に見わる，夫婿 <sup>おそ</sup>らくは應に知るべし）」。

〔按〕呂叔湘氏の『漢語語法論文集』190頁「語法札記」11「莫須有」の条に「莫」のこの種の用法とその歴史の変遷が論及されている<sup>50</sup>。本項目はそれに基づき語義を定めた。(大山)

## 22. 驀 mò

越える。李賀「馬詩 二十三首」其十八（『全唐詩』卷391）「只今掎白草，何日驀青山（只今 白草を<sup>あつ</sup>掎むるも，何れの日にか青山を驀えん）」。

〔按〕『説文解字』卷10上「馬」部に「驀，上馬也（驀は，馬に上るなり）」とあるが，「越える」という意味とはなお隔たりがある<sup>51</sup>。李賀の詩に見える「驀」は唐代の口語であり，敦煌変文の用例が証拠である。例えば「伍子胥変文」の「今日登山驀嶺（今日山に登り嶺を驀えん）」<sup>52</sup>や，「燕子の賦」の「人急焼香，狗急驀牆（人は急ぎ香を焼き，狗は急ぎ牆を驀ゆ）」，などである<sup>53</sup>。「驀」字はまた「超（趙）」に作り，『広韻』入声陌韻では「莫白の切」とあり，「驀」と同音であり，しかも「越」と訓じている<sup>54</sup>。この語は六朝期にはすでにあった。例えば郭璞「江賦」（『文選』卷12）に「趙漲截洄（漲を<sup>マ</sup>趙え洄を<sup>わた</sup>截る）」とあり，李善注に「趙，猶越也（趙，猶お越なり）」とある<sup>55</sup>。李賀「送沈亞之之歌（沈亞之を送る歌）」（『全唐詩』卷390）に「煙底驀波乘一葉（煙底波を驀えて一葉に乗ず）」とある。まさしく郭璞の「江賦」の用法から受け継がれたものである。(大山)

## 23. 戚促 qīcù

形容詞。辛勤勞苦の意。多忙でせわしないの意。「刺促（世事にあくせくする様）」の異なる形。李白「空城雀（空城の雀）」（『全唐詩』卷164）「嗷嗷空城雀，身計何戚促（嗷嗷たり 空城の雀，身計何ぞ戚促たる）」これは苦勞して食べ物を求めることをいう。白居易「秋日与張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡二百三十八字（秋日張賓客・舒著作と<sup>とも</sup>に龍門に遊び醉中狂歌<sup>すべ</sup>す凡て三十八字）」（『全唐詩』卷452）「況吾頭白眼已暗<sup>56</sup>，終日戚促何所成（況んや吾が頭白く眼已に暗し，終日戚促として何の成す所あらんや）」。楊衡「宿陟岵寺雲律師院（陟岵寺 雲律師の院に宿る）」（『全唐詩』卷465）「願回<sup>57</sup>戚促勞，趨隅事休逸（戚促たる勞を回くるを願ひ，趨隅<sup>58</sup>は休逸を事とす）」これは辛勤勞苦するという意味である。

〔蹙促〕 cùcù「戚促」に同じ。白居易「長樂亭留別（長樂亭にて留別す）」（『全唐詩』卷450）「昔日蹙促為遷客，今日從容自去官（昔日 蹙促として遷客と為り，今日 從容として自ら官を去る）」「蹙促」は「從容（ゆったりしている様）」と対になっており，多忙でせわしないという意味である。また「送客春遊嶺南二十韻（客の春 嶺南に遊ぶを送る二十韻）」（『全唐詩』卷440）「離容君蹙促，贈語我殷勤（離容 君蹙促たり，贈語 我殷勤たり）」徐凝「誇紅槿（紅槿を誇る）」（『全唐詩』卷474）「道槿花生感促，可怜相計半年紅。何如桃李無多少，併打千枝一夜風（誰か<sup>い</sup>道う 槿花感促を生ずと，憐れむべし相い<sup>かぞ</sup>計うること半年の紅なるを。何如ぞ桃李の多少無きを，併せて千枝を打つ一夜の風）」「感」は「蹙」の誤りであろう。（『全唐詩』の原文は「感」で

ある)。意味は上記「蹙促」に同じ。

〔脆促〕cuìcù「蹙促」に同じ。徐彦伯「題東山子李適碑陰（東山子李適の碑陰に題す）」其二（『全唐詩』卷76）「回也実夭折，賈生亦脆促。今復哀若人，危光迅風燭（回や実<sup>まこと</sup>に夭折す，賈生も亦た脆促たり。今復た哀れむ<sup>かくのこと</sup>若き人の，危光<sup>と</sup>迅きこと風燭のごときを）」これは多忙でせわしないという意味である。

〔戚草〕qīcǎo「蹙促」に同じ。杜牧「赴京初入汴口曉景即事先寄兵部李郎中（京に赴くに初めて汴口に入る曉景即事 先に兵部李郎中に寄す）」（『全唐詩』卷520）「因懷京洛間，宦遊何<sup>おも</sup>戚草（因りて京洛の間を懷う，宦遊 何ぞ戚草たる）」これは多忙でせわしないという意味である。

〔刺蹙〕qìcù「蹙促」に同じ。李白「古風詩」其四十（『全唐詩』卷161）「鳳飢不啄粟，所食唯琅玕。焉能与群鷄，刺蹙争一餐（鳳は飢うるも粟を啄まず，食らう所は唯だ琅玕。焉んぞ能く群鷄と，刺蹙として一餐を争わんや）」この例は苦勞して食べ物を求めることを表す。（関）

## 24. 其如qírú

「其如……何」の省略形，「怎奈……何（いかんせん）」或いは「怎奈（いかんせん）」。<sup>60</sup>孟浩然「初年樂城館中臥疾懷歸作（初年樂城の館中疾に臥し歸るを懷う作）」（『全唐詩』卷160）「徒對芳樽酒，其如伏枕何（徒らに芳樽の酒に對す，枕に伏すを其如何せん）」酒を飲みに行きたいが，病の床にあるのでどうしようもなく，飲みに行くことができないという意味。李白「寄遠（遠きに寄す）」（『全唐詩』卷184）「腸斷若剪弦，其如愁思何（腸斷ちて弦を剪つがごとし，愁思を其如何せん）」。<sup>61</sup>孟浩然「京還贈張維（京より還るに張維に贈る）」（『全唐詩』卷160）「欲徇五斗祿，其如七不堪（五斗の祿に徇わんと欲するも，七不堪を其如何せん）」「七不堪」は嵇康の「与山巨源絶交書（山巨源に与うる絶交の書）」<sup>62</sup>に見える。嵇康は，己は生来の怠け者で，官職に就くのには堪えられないことが七つあるという。唐玄宗「送賀知章歸四明（賀知章の四明に歸るを送る）」（『全唐詩』卷3）「豈不惜賢達，其如高尚心（豈に賢達を惜しまざらんや，高尚の心を其如何せん）」この句は，賀知章を引き留め，官職を辞して故郷に歸ることのないようにしたいが，賀知章の高尚な心をどうすることもできない，という意味。杜甫「傷春」（『全唐詩』卷228）「不是無兄弟，其如有別離（兄弟無きに是らざるも，別離有るを其如何せん）」。<sup>63</sup>杜甫「歸燕」（『全唐詩』卷225）「不独避霜雪，其如俦侶稀（独り霜雪を避くるのみならず，俦侶の稀なるを其如何せん）」歸燕<sup>64</sup>が南へ飛んで行くのは霜雪を避けるためだけではなく，残った仲間がもう少なくなったのでやむなく南へ歸るのだ，という意味。（関）

## 25. 豈qǐ

①反語を表す副詞。現代中国語の「難道（まさか～ではあるまい）」「哪里（～であるものか）」に相当する。しかし唐詩の中では，時に「豈必」「何必」（～する必要はないではないか）に相当する。張九齡「叙懷」（『全唐詩』卷47）「志合豈兄弟，道行無貧賤<sup>65</sup>（志 合するは豈に兄弟ならんや，道 行うに貧賤無し）」志を同じくするものは知己であって，血のつながった兄弟である必要はないではないか，ということ。李白「秋日鍊藥院鑷白髮贈元六兄林宗（秋日 鍊藥院に白髮を鑷く元六兄林宗に贈る）」（『全唐詩』卷169）「時來極天人，道在豈吟嘆（時 来たりて天人を極め，道 在り豈に吟嘆せんや）」「豈吟嘆」とは吟嘆する必要はないではないか，ということ。杜牧「早雁」（『全唐詩』卷522）「須知胡騎紛紛在，豈逐春風一一回（須らく知るべし胡騎紛紛として在るを，豈に春風を逐いて一<sup>かえ</sup>回らんや）」「逐」は「隨」に同じ。北方の戦乱が平定されていないのだから，早雁は歸る必要はないではないか，ということ。

②「豈非（～ではないだろうか）」，「豈不（～ではないか）」。<sup>66</sup>孟浩然「入峽寄弟（峽に入りて弟に寄す）」（『全唐詩』卷159）「吾昔与汝<sup>67</sup>輩，読書常閉門。未嘗冒湍險，豈顧垂堂言（吾 昔 汝が輩と，書を讀みて常に門を閉ざす。未だ嘗て湍險を冒さず，豈に垂堂の言を顧みざらんや）」垂堂の言とは，「家に千金を累ぬれば，坐して堂（軒下）に垂せず」という諺のこと。「豈顧」とは「豈不顧（豈顧みざらんや）」ということ。杜甫

「楠樹為風雨所拔嘆（楠樹風雨の抜く所と為るを嘆く）<sup>64</sup>」（『全唐詩』卷219）「幹<sup>65</sup>排雷雨猶力爭，根斷泉源豈天意（幹 雷雨を排して猶お力爭す，根 泉源に断ゆるは豈に天意ならざらんや）」これは、天意ではないだろうか、ということ。杜甫「八哀詩」贈秘書監江夏李公邕（秘書監江夏李公邕に贈る）（『全唐詩』卷222）「爭名古豈然，鍵捷歎不（名を争うこと<sup>いにしえ</sup>に然からざらんや，<sup>けんじょう</sup>鍵捷を歎ち閉さざればなり）」この句は、名を争う例は昔からあるということ。杜甫「病橘」（『全唐詩』卷219）「剖之尽蠹虫，采掇爽其宜。紛然不適口，豈只存其皮（之を<sup>さいてつ</sup>剖けば尽く蠹虫す，<sup>たが</sup>采掇其の宜しきに爽う。紛然口に適せず，豈に只に其の皮を存するのみならざらんや）。杜甫「咏懷」（『全唐詩』卷216）「聖人筐篚恩，實欲邦国活。臣如忽至理，君豈棄此物（聖人<sup>きようひ</sup>筐篚の恩，<sup>まこと</sup>實に邦国の活せんことを欲す。臣 如し至理<sup>しん も</sup>を忽にせば，君 豈に此の物を棄てざらんや）」「此物」とは、上句でいう「筐篚（竹籠）」のこと，皇帝が家臣たちに賜う布を指す。もし群臣が国のために尽くさないならば，君主は虚しく恩賜の布を棄てることになるではないか，ということ。上述した例中の「豈」はもし「難道（まさか～ではあるまい）」と解釈してしまうと意味が逆になってしまい，前後の文とうまく繋がらなくなる。（関）

## 26. 起qǐ

「豈」に同じ。杜甫「九日五首」其一（『全唐詩』卷231）「重陽独酌懷<sup>66</sup>中酒，抱病起登江上台。竹葉於人既無分，菊花從此不須開從此不須開（重陽独り酌む懷中の酒，病を抱きて起に江上の台に登らんや。竹葉<sup>67</sup>人に於いては既に分無し，菊花 此れより開くを須いず）」「独酌」を「少飲」に作るものがあり，「起」を「独」または「豈」に作るものがある。病を抱えていることが酒をたまにしか飲めない原因であり，台に登ることは病を抱えた身に堪えられるものではない。そこで「少しく飲む」，「豈に登らんや」というのだ。「少しく飲む」は飲む量が少ないのではなく，飲まない時が多いことをいう。重陽の日に飲むことができず，機会を一つ失ったようだという事。「起」字は誤字ではなく，唐代の人が写本する際広く用いられていた。敦煌「浣溪沙」<sup>68</sup>「幽境不曾凡客到，起尋常（幽境曾て凡客到らず，<sup>あ</sup>起に尋常ならんや）」これは「豈尋常也（豈に尋常ならんや）」ということ。詩中に言う「豈に江上の台に登らんや」「此れより開くを須いず」は，いくらか怨望の心情が込められている。もし「台に登る」と解釈すると，次聯と意味が通じなくなる。（関）

## 27. 恰qià

範圍を表す副詞。「只だ」「僅かに」の意。杜甫「南隣」（『全唐詩』卷219）「秋水才<sup>た</sup>深四五尺，野航恰<sup>わづ</sup>受兩三人（秋水才かに深し四五尺，野航恰かに受く兩三人）」。（関）

## 28. 恰恰qiàqià

杜甫「江畔独歩尋花七絶句（江畔に独り歩き花を尋ぬ七絶句）」其六（『全唐詩』卷227）「留連戲蝶時時舞，自在嬌鶯恰恰啼（留連する戲蝶は時時に舞い，自在なる嬌鶯は恰恰として啼く）」この中で「恰恰」の語は，馬茂元『唐詩選』<sup>70</sup>，新版『辞海』<sup>71</sup>，『漢語大詞典』では鳥の鳴き声を表す擬音語だと解釈している。ただし，鳥の鳴き声だという解釈に対しては，昔の人も早くから懷疑的であった。（清）翁方綱『石洲詩話』<sup>72</sup>卷一「杜詩『自在嬌鶯恰恰啼』，今解『恰恰』為鳴声矣。然王績詩『年光恰恰來』，白公『悟真寺』詩『恰恰金碧繁』，疑唐人類如此用之（杜詩に『自在嬌鶯恰恰啼』とあるは，今解して『恰恰』を鳴声と為す。然れども王績詩<sup>73</sup>『年光恰恰來（年光 恰恰として來たる）』，白公『悟真寺<sup>74</sup>』詩『恰恰金碧繁（恰恰として金碧繁し）』，疑うらくは唐人類<sup>おほひ</sup>ね 此くのごとく之を用う）。（清）施鴻保『讀杜詩說』<sup>75</sup>卷一〇でも「恰恰与鶯声不類（恰恰 鶯声とせず）」と考えて「適當の辞」と解釈し，さらに，作者「独歩之時之處，適當鶯啼（独歩の時の處，鶯啼に適當す）」と言う。今考えるに，「恰恰」を 鶯の声と解釈するのは，そもそも検討を要する。しかし施氏の説もまた確実な論とは言えない。なぜなら「恰恰」については確かに「恰巧」「正好」（ちょうどよく）の意味があるものの，先に例挙した杜詩にあてはめるにはまだ適切と断言できない。第一に，この一聯は対句なので，もし「恰恰」を「ちょうどよく」と解釈すれば，上句の「時時」と意味の上で釣り合わない。第二に，

「鶯啼蝶舞」とは詩人が目にする前から既にずっと存在した風景であり、詩人がこの風景の中にちょうど歩み入る際に、鶯がまさに一声二声啼いたという可能性は低い。「恰恰」の語は唐宋口語の中で「密密」（きわめて密である）という意味を表すことがある。上に引用した『石洲詩話』に例挙げた「悟真寺」詩の「恰恰金碧繁」はこの意味に属す。

[洽洽] qiàqià「恰恰」に同じ。密集する様。蔣礼鴻『敦煌变文字義通釈』<sup>76</sup>収用の『降魔变文』に「峻嶺高岑 総安致（置），洽洽遍布不容針（峻嶺高岑 総て安致（置）するに，洽洽として遍く布きて針を容れず）」。韓愈「華山女」（『全唐詩』卷341）「聴衆洽洽<sup>77</sup>排浮萍（聴衆洽洽として浮萍を排す）」。白居易「吳桜桃」（『全唐詩』卷447）「洽洽拳頭千万顆（洽洽として頭を拳ぐ 千万顆）」等の例は，山峰・聴衆・桜桃等の人や事物が密集し一所に集まる様を描写している。（関）

## 29. 遷次 qiāncì

形容詞または副詞。「草率（おろそかな）」「簡陋（粗末な）」「倉卒（せわしい）」「迅疾（はやい）」ということ。杜甫「入宅三首（宅に入る三首）」其三（『全唐詩』卷229）「客居愧遷次，春酒漸多添（客居の遷次かなるを愧じ，春酒漸く多く添う）」「酒」を「色」に作るものがある。また「王十五司馬弟出郭相訪兼遺茅屋資<sup>78</sup>（王十五司馬弟 郭を出でて相訪い 兼ねて茅屋を営む資を遺る）」（『全唐詩』卷226）「客裏何遷次，江辺正寂寥（客里何ぞ遷次かなるや，江辺正に寂寥たればなり）」この二例は共に客居の作りがぞんざいで粗末なことをいう。白居易「感秋詠意（秋に感じて意を詠ず）」（『全唐詩』卷458）「炎涼遷次速如飛，又脱生衣著熟衣（炎涼 遷次しく速かなること飛ぶがごとし，又た生衣を脱して熟衣を著る）」。羅隱「旅夢」（『全唐詩』卷659）「旅夢思遷次，窮愁有嘆嗟（旅夢 遷次しきを思い，窮愁 嘆嗟有り）」。韓愈「贈徐州族侄<sup>79</sup>（徐州の族侄に贈る）」（『全唐詩』卷345）「歲時易遷次，身命多厄窮（歲時遷次しくなり易く，身命 厄窮多し）」この三例は全てせわしく，はやいという意味。羅隱詩の「思」は「無」に作るものがあり，こちらのほうがやや適当か。「無遷次」は「毋倉卒（倉卒たること毋かれ）」ということ。後に続く「有嘆嗟」と対をなす。（関）

## 30. 占 zhàn

動詞，めでる（楽しむ），鑑賞する。杜甫「奉陪鄭駙馬韋曲二首（鄭駙馬に韋曲に陪し奉る二首）」<sup>80</sup>（『全唐詩』卷225）「何時占叢竹，頭戴小烏巾（何れの時か叢竹を占で，頭に小烏巾を戴かん）」「小烏巾」は隱者の装束であり，ここでは「いつになったら山林に隱居して，叢竹を楽しめるのだろうか」と言う。また，杜甫「江頭四詠 丁香」<sup>81</sup>（『全唐詩』卷227）「深栽小齋後，庶使幽人占（深く小齋の後に栽え，庶わくは幽人をして占でしめん）」。韓愈「遊太平公主山莊（太平公主の山莊に遊ぶ）」（『全唐詩』卷344）「公主当年欲占春，故將台榭壓城闌（公主 当年 春を占でんと欲し，故より台榭を將て城闌に圧る）」。劉禹錫「酬樂天感秋涼見寄（樂天の秋涼に感じて寄せらるるに酬ゆ）」（『全唐詩』卷358）「閑人占閑景，酒熟且同傾（閑人 閑景を占で，酒 熟して且らく同に傾けん）」また，劉禹錫「酬令狐相公見寄（令狐相公に寄せらるるに酬ゆ）」（『全唐詩』卷360）「閑遊占得嵩山色，醉臥高聽洛水聲（閑遊して占で得たり嵩山の色，醉臥して高く聽く洛水の聲）」また，劉禹錫「夜聞商人船中箏（夜 商人の船中の箏を聞く）」（『全唐詩』卷365）「揚州市裏商人女，來占江西明月天（揚州市裏 商人の女，來りて占づ 江西 明月の天）」。李商隱「垂柳」（『全唐詩』卷539）「七賢寧占竹，三品且饒松（七賢 寧ろ竹を占で，三品 且らく松に饒る）」。（長谷川）

## 31. 遮莫 zhēmò

①「尽教（＝「尽管」，さもあらばあれ<sup>82</sup>，任せる，かまわない）」の意であり，これは『鶴林玉露』の説<sup>83</sup>による。字は「折莫」「折末」「折麼」「者莫」「者么」「者磨」とも作る。杜甫「書堂飲既，夜復邀李尚書，下馬月下賦絕句（書堂に飲み既り，夜 復た李尚書を邀え，下馬して月下に絶句を賦す）」（『全唐詩』卷232）「久拚野鶴如霜鬢，遮莫鄰鷄下五更（久しく拚す野鶴の霜鬢の如くなるに，遮莫鄰鷄 五更に下るを）」「ともかく

も酒を飲んで朝になってもかまわない」と言うのである。方干「贈鄰居袁明府（鄰居の袁明府に贈る）」（『全唐詩』巻650）「朝昏幸得同醒醉，遮莫光陰自下坡（朝昏 幸いに共に醒醉するを得たり，遮莫光陰 自ら坡に下るを）」この意味は杜詩から借用したものである。

②「不論（論ぜず，～であるか～であるかを論じない）」あるいは「不問（問わず，問わない）」の意である。岑參「原頭送范侍御（原頭にて范侍御を送る）」（『全唐詩』巻201）「別君祇有相思夢，遮莫千山与万山（君に別れて祇だ相思の夢有り，遮莫千山と万山とを）」。

③「仮如（たとい，～であろうとも）」の意である。「者莫」も同じ。劉朝霞が献上した「明皇帝幸温泉詞」（「駕幸温泉賦」）に「遮莫爾古時千帝，何如我今日三郎（遮莫 你 古時千帝なるも，何如せん 我 今日三郎なるを）」ここでは二句一組の呼応の句法であり，下句は「何如」と言うので，上句の「遮莫」は，「仮如」と解するとふさわしい。文は仇兆鰲『杜詩詳注』巻21に引く（唐）鄭綮『開天伝信記』に見える。李白「少年行」（『全唐詩』巻165）「遮莫枝根長百丈，不如当代多還往。遮莫姻親連帝城，不如當身自簪纓（遮莫枝根 長さ百丈なるとも，当代多く還往するに如かず。遮莫姻親 帝城に連なるとも，當身自ら簪纓するに如かず）」。

④「甚麼（なに）」の意である。「者麼」「者末」「折莫」も同じ。李白「寒女吟」（『才調集』巻6）「憶昔嫁君時，曾無一夜樂。不是妾無堪，君家婦難作。起來強歌舞，縱好君嫌惡。下堂辭君去，去後悔遮莫（憶う昔 君に嫁せし時，曾て一夜の楽しみも無し。是れ妾の堪うる無きにあらず，君家 婦は作り難し。起ち来りて強いて歌舞し，縱い好むも君嫌惡す。堂を下りて君に辭して去り，去りて後は遮莫をか悔いん）」「悔遮莫」は，「何を悔いることがあろうか」の意であり，ここでは別れの言葉である。（長谷川）

### 32. 遮渠 zhēqú

「尽他」あるいは「任他」（ままよ，さもあらばあれ）の意である。「遮莫」は「尽教」の意に解し，ここでも「遮」は同様である。賀智章「答朝士（朝士に答う）」（『全唐詩』巻112）「銀鏤銀盤盛蛤蜊，鏡湖蓴菜亂如絲。鄉曲近來佳此味，遮渠不道是吳兒（銀鏤の銀盤は蛤蜊を盛り，鏡湖の蓴菜は乱ること糸の如し。鄉曲 近來 此味を佳とするは，遮渠 道らず 是れ吳兒なるを）」「遮渠不道」はひとつの熟語である。「不道」は「不料（はからず）」であり，「予測できようとできまいとかまわない」と言うのである。「吳兒」は暗に「木人石心」の故事を用いたのであろう，賈充は夏統を「此の吳兒は是れ木人石心なり」と称しており，『晋書』巻94夏統伝に見える。詩意は「木石心腸の（感情の無い）吳兒（吳の若造）どもが，まさかこの味わいだけは心得ていたとは思ひもしなかった」と言う。白居易「答州民（州民に答う）」（『全唐詩』巻411）「宦情斗擲隨塵去，鄉思銷磨逐日無。唯擬騰騰作閑事，遮渠不道使君愚（宦情 斗擲して塵に隨いて去り，鄉思 銷磨して日を逐いて無し。唯だ騰騰として閑事を作さんと擬す，遮渠 道らず 使君 愚なるを）」「遮渠不道」の意味は上に同じ，「使君がこんなにも愚かで，その閑事を好む心は最後まで改まらないとは思ひもしなかった」と言う。この詩は二首一組で，上一首の「代州民間（州民に代わって問う）」（『全唐詩』巻441）に「龍昌寺底開山路，巴子台前種柳林。<sup>84</sup>官職家鄉都忘却，誰人會得使君心（龍昌寺底 山路を開き，巴子台前 柳林を種う。官職家鄉 都て忘却し，誰人が會し得ん 使君の心）」と言ひ，「閑事」とは，山を開き木を植えることを指す。元稹「放言」（『全唐詩』巻413）「乞我杯中松葉滿<sup>85</sup>，遮渠肘上柳枝生<sup>86</sup>（乞う我が杯中 松葉の満つるを，遮渠肘上柳枝の生ずるとも）」ただ杯中に酒を満たせて，身体に変化が生じてもかまわないと言う。（長谷川）

### おわりに

以上，32の用例を訳出した。ここにはたとえば「方」「毎」「豈」等の，よく用いられる副詞が見られた。しかし「方」を「はじめて」と解するか，或いは「既に」と解するか，「毎」を「常々」と解するか，「かつて」と解するかでは，一詩全体の解釈が大きく異なってくる。「豈」も同様に，反語と詠嘆の意味があり，作者の主張・感情が込められる部分であるだけに，解釈には注意が必要である。他に，「遮莫」「遮渠」という唐代俗語の表現は，日本に伝わってから菅原道真等の漢詩によく詠まれた語であるが，複数の意味があることには留意する必要がある。全体を通して窺われるのは，杜甫の用例が多いことと，対句と互文の用法に異読が多いことである。この点は，既に以前の紀要にて指摘していることでもある。

今後も継続して唐詩の用例を中心に訳出と検討とを進め、唐詩における異読語彙の全体像を把握することを目標としている。それにあわせて、個々の詩人における特殊な用法や、時代や地方に共通する傾向、語義の変遷などをも検討するつもりである。しかし用例が膨大なため、誤読の可能性もある。ご示教を仰ぐ次第である。

## 注

- 1 琴曲の名。『楽府詩集』巻60琴曲歌辞・李季蘭「三峡流泉歌」に「『琴集』曰「三峡流泉」，晋阮咸所作也」とある。
- 2 蒋寅校注『戴叔倫詩集校注』（上海古籍出版社，1993年）は「別」の字は衍字の可能性があるといる。
- 3 分憂とは郡守の職のこと。
- 4 『全唐詩』に「新月与儿女夜坐聽琴舉酒」に作る。
- 5 『全唐詩』に「中央」に作る。
- 6 逯欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局，1983年）。
- 7 清・劉淇『助字辨略』（台湾開明書店，1976年）。
- 8 『詩經』国風・秦風・小戎「方何為期」。
- 9 庾信「哀江南賦」「小人則將及水火，君子則方成猿鶴」（『全上古三代秦漢三國六朝文』全後周文卷八）。
- 10 不正な手段で財物を受け取った罪。
- 11 丸い錢のこと。
- 12 『全唐詩』に「示女詩」に作る。
- 13 辞海編輯委員會編『辞海（1979年版）』（上海辞書出版社，1979年）。
- 14 蒋礼鴻『敦煌變文字義通釈』増定本（上海古籍出版社，1981年）。
- 15 「唐詩俗語新考」の誤り。塩見氏の原文には「唐詩に於ては「手段・手だて」の意として使用されるが，そこに「わざとらしい」というニュアンスがある」，「「わざとらしく手段を勞する」ニュアンスを持って使用されている」とある。
- 16 黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局，1987年）。
- 17 注14の蒋礼鴻書では57頁に「胎子」の項を収めている。
- 18 『全唐詩』に「更」に作る。
- 19 水時計のこと。
- 20 『全唐詩』に「晩」に作る。
- 21 『全唐詩』に「度」に作る。
- 22 明るく曇りのない鏡をたとえる。
- 23 『全唐詩』に「淨衆寺」に作る。
- 24 清・仇兆鰲『杜詩詳注』（中華書局，2015年）。
- 25 清・仇兆鰲『杜詩詳注』は「可」に作る。
- 26 中国社会科学院文学研究所編『唐詩選』（人民文学出版社，1978年）。
- 27 清・楊倫箋注『杜詩鏡銓』（上海古籍出版社，1981年）は「言視安如危，乃前賢慮患深遠之道」に作る。
- 28 宋・李昉『太平広記』（人民文学出版社，1959年）。
- 29 『全唐詩』巻768「贈吳円」。
- 30 『全唐詩』に「林園」に作る。
- 31 『全唐詩』に「在」に作る。
- 32 『杜工部草堂詩箋』は「激作擊，非是。陳作激，「正異」同。」と注する。この「陳」が陳師道を指すと思われる。
- 33 『古逸叢書』所収
- 34 王重民等輯併校注『敦煌變文集』（人民文学出版社，1957年）
- 35 『全唐詩』に「平生」に作る。
- 36 『全唐詩』に「共」に作る。
- 37 王鏊『唐宋筆記語辭彙釈』修訂本，中華書局，2001年）
- 38 釈詁は誤り。王念孫『広雅疏証』（高郵王氏原刻本影印，新興書局，1965年）巻第5上釈言に見える。

- 39 『杜詩趙次公先後解輯校』（修訂本，上海古籍出版社，2012年）乙帙卷之二。
- 40 『全唐詩』に「絶句九首」に作り，「前六首已見第十三卷中」と注する。
- 41 『全唐詩』に「設」に作り，「一作謾」と注する。
- 42 『全唐詩』に「大」に作る。
- 43 『全唐詩』に「依依」に作る。
- 44 『全唐詩』に「興」に作り，「一作与」と注する。
- 45 「浪土」は「浪士」の誤り。『新唐書』卷143元結伝に「天下兵興，逃乱入猗玕洞，始称猗玕子。後家灊滨，乃自称浪士」とある。
- 46 『全唐詩』に「河南河北」に作る。
- 47 『全唐詩』に「有客」に作り，「一作賓至」と注する。
- 48 陳尚君輯校『全唐詩補編』（中華書局，1988年）上卷所収。
- 49 『全唐詩』に「狎恰」に作り，「一作匿匿，一作恰匿」と注する。いずれも物をめぐらせる様をいう。
- 50 呂叔湘『漢語語法論文集』（初版本，科学出版社，1955年），「語法札記」11「莫須有」。
- 51 『説文解字』（大徐本，陳昌治刻本影印，中華書局，1963年）卷10上「馬」部。
- 52 黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』（中華書局，1997年）卷1。
- 53 同上書卷3所収の「燕子賦」（1）
- 54 『宋本広韻』（沢存堂本影印，芸文印書館，1998年）卷5，入声第20「陌」韻に，「趙，超越」とある。
- 55 『文選』（上海古籍出版社排印本，2019年）卷12，郭璞「江賦」に「鼓帆迅越，趙漲截洞」とあり，李善は「趙，猶越也」と注する。本文「洄」は「洄」の誤り。
- 56 『全唐詩』に「闇」に作る。『白香山詩集』（清・汪立名）編訂に「暗」に作る。
- 57 『全唐詩』に「迴」に作る。
- 58 「趨隅」は仏教語で端座静修すること。
- 59 『全唐詩』に「遊」を「幽」に作る。
- 60 『文選』「与山巨源絶交書」「性復疏嬾，筋驚肉緩，頭面常一月十五日不洗，不大悶癢，不能沐也。（中略）又人倫有礼，朝廷有法，自惟至熟，有必不堪者七，甚不可者二」。
- 61 『詩詞曲語辭典』原文では「帰雁」となっている。
- 62 『全唐詩』に「道行無賤貧」に作る。
- 63 『全唐詩』に「爾」に作る。
- 64 『全唐詩』に「柶（一作高）」に作る。
- 65 『全唐詩』に「幹」に作る。／一作「幹」
- 66 『全唐詩』に「杯」に作る。
- 67 「竹葉」は酒の名。
- 68 舒蘭編『敦煌歌辭總編』（渤海堂文化公司，1989年）。
- 69 『全唐詩』に「纔」に作る。
- 70 馬茂元『唐詩選』（上海古籍出版社，1999年）。
- 71 辞海編輯委員會編『辞海（1979年版）』（上海辞書出版社，1979年）。
- 72 翁方綱『石洲詩話』（人民文学出版社，1981年）。
- 73 「春日（一作初春）」王績（『全唐詩』卷37）。
- 74 「遊悟真寺詩（一百三十韻）」白居易（『全唐詩』卷429）。
- 75 施鴻保『讀杜詩說』（香港中華書局，1964）。
- 76 蔣禮鴻『敦煌變文字義通釈（増補定本）』（上海古籍出版社，1981）。降魔變文：“便向厖中選壯象，開庫純磨金。峻嶺高岑 総安致（置），恰恰遍布不容針”。
- 77 『全唐詩』に「聽眾狎恰（唐人語）排浮萍」に作る。
- 78 『全唐詩』に「聽眾狎恰（唐人語）排浮萍」に作る。
- 79 『全唐詩』に「贈徐州族姪」に作る。
- 80 「鄭駙馬」は鄭潜曜，杜甫の親友鄭虔の甥で，玄宗皇帝の娘臨晉公主の夫。韋曲は長安の南三十里にある行楽地。

- 81 「丁香」(チョウジ), 「梔子」(クチナシ), 「鶺鴒」(オシドリ), 「花鴨」(カモ) の四篇。『杜詩詳注』 卷10は「丁香」の後に「麗春」(ケシ) が入り, 「江頭五詠」とする。
- 82 鈴木一男「「就中・加之・遮莫・拳世」の訓法小論」(『樟蔭国文学』 第17巻, 大阪樟蔭女子大学, 1979年), 古田恵美子「中国語「遮莫」「任他」等の受容と「さもあらばあれ」」(『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ 人文科学』 第5巻, 2003年) を参照。
- 83 『鶴林玉露』(南宋羅大経の随筆。『和刻本漢籍随筆集』 第8集所収) 卷13「遮莫」を参照。
- 84 『全唐詩』に「巴山台前種柳林」に作る。『白氏文集』 諸本によって改める。
- 85 「松葉」は酒のこと。
- 86 「柳枝」はこぶのこと。「柳」は「瘤」に通じる。『莊子』 外篇「至楽」に「支離叔與滑介叔觀於冥伯之丘, 崑崙之虛, 黃帝之所休。俄而柳生其左肘, 其意蹶蹶然惡之。」と。

On Distinctive Usage of Poems in Tang (唐)  
Dynasty from SHICIQUYUCICIDIAN  
(詩詞曲語辭辭典) Edited by Zhonghua Shuju (中華書局) Vol.7

TAKAHASHI Miki<sup>\*1</sup>, HASEGAWA Masashi<sup>\*2</sup>, OYAMA Iwane<sup>\*3</sup>,  
ARIKI Daisuke<sup>\*4</sup>, SEKI Sayuri<sup>\*5</sup> and TODAKA Rumiko<sup>\*2</sup>

*Chinese Classics*

(Received for Publication; August 30, 2023)

**Abstract**

This paper analyzed special usage of a Chinese poem of Tang dynasty. On the poetry and the play words from the Tang dynasty to Jin, Ming dynasty, it depends on influence of the time, locality and a social class, slang, spoken language and a dialect are included. Those are different from the orthodox meaning, necessary to grasp the meaning of the special vocabulary (It's called "idoku" in this paper) to interpret precisely. So we tried the "SHICIQUYUCICIDIAN (詩詞曲語辭辭典)" edited by Zhonghuashuju (中華書局) which includes usage of "idoku" much.

As a result of the consideration, we founded examples and vocabulary with the meaning of a word different in plural. In particular, because of particles that interpretation is of the whole poetry, we re-recognized the importance of the fixation of meaning of a word. It's that there is a lot of "idoku" in an antithesis of gobun (互文) to be common to whole examples. And meaning of those words were succeeded from Tang and Song poetry to Yuan play words.

**Keywords:** Chinese poem, Tang poetry, "idoku", poetic vocabulary

---

\*1 Osaka Metropolitan University (3-3-138 Sugimoto Sumiyoshi-ku, Osaka-shi, 558-8585, Japan)

\*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

\*3 Asia University (5-8 Sakai, Musashino City, Tokyo 180-8629, Japan)

\*4 Junior & Senior High School at Komaba, University of Tsukuba (4-7-1 Ikejiri, Setagaya-ku, Tokyo, 154-0001, Japan)

\*5 Hyogo Prefectural Amagasaki-Inazono High School (3-1-1 Inadera, Amagasaki-shi, Hyogo, 661-0981, Japan)